

Aoyama Gakuin Museum Letter

No.
2

▼ 青山学院ミュージアム キリスト教史の展示室

(画像提供：丹青社 撮影：Level9 Inc.)

厚木キャンパス時代のウェスレーチャペルに飾られていたステンドグラスが印象的な展示室となっており、その面発光の清浄な光に包みこまれる空間の中で、メソジスト教会の歴史や近世以前の禁教時代、近代以降の日本のキリスト教の歴史に触れることができる。



青山学院ミュージアム
AOYAMA GAKUIN MUSEUM

公開座談会「青山学院の歴史を語り合う会」開催報告	2 ~ 3
青山学院史探訪	4 ~ 5
企画展開催報告	6
青山学院ミュージアム展示資料紹介	7
Museum News	7 ~ 8

第3回「戦後復興期の青山学院」



日時：2026年3月13日（金）14時～16時

会場：大学10号館2階第23会議室

青山学院ミュージアム館長 小林 和幸

青山学院ミュージアム事務室 稲村 伸子

青山学院の歴史を語り合う会は、第14代院長・梅津順一先生が、青山学院の歴史の中でも特に学生生活、クラブ活動等について語り合い、青山学院の歴史を共有する機会が少ないことを憂慮して始められた企画です。史資料から著す歴史とは別に、身近な青山学院の歴史をざっくばらんに語り合う会を継続的にを行い、校友の皆様に母校への親しみを感じ、学院との結びつきを考えるきっかけとなることを目指しております。

2018年4月に開催された第1回は、「1964年東京オリンピックと青山学院」と題し、当時学生ボランティアとして通訳をなさった方、高校生であった方を中心に語り合っていました。2020年開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックにどのように関わっていけるのかということにも繋げることを目指しました。

第2回は2020年1月に開催され、「戦争末期・終戦直後の青山学院」と題し、青山学院で学ばれた方、構内に住んでおられた方など5名の方々による思い出を中心とした発表をお聞きました。

その後、コロナ禍を経て青山学院ミュージアム開設準備のため中断していましたが、この度6年ぶりに第3回を開催する運びとなりました。「戦後復興期の青山学院」と題して戦後復興期に青山学院で学ばれた方、青山学院で教職に就かれた方など3名から、当時の青山学院の様子のお話を伺いました。当日、司会を務めた小林館長が報告者のお話の一端をまとめたものをお届けします。（稲村）

~~~~~

最初にお話を伺った井上文子様は、大戦中、青山学院緑岡初等学校（5回生）に入られ、終戦後の昭和22（1947）年に青山学院初等部を卒業されました。その後、青山学院中等部に進まれ、さらにお茶の水女子大学附属高等学校に進学されました。

井上様は、「1945年、6月10日に品川駅から（疎開先の青森に向かう）緑岡初等学校のお仲間入りをさせていただきました。それも東京が大空襲で焼けてしまったので、湯ヶ島から再疎開をする生徒に焼け跡を見せたくないという考えから列車は夕方出発したそうで、

品川駅は午後8時から10時ごろでございました。それもホームに着くのではなくて、ただの線路の上でしたので、それこそ高さが全然違うんですね。それをよじ登るようにしてお仲間入りをさせていただきました」と話され、弘前のリンゴ農家ででの生活や玉音放送を聞いた日のこととお話いただき、また終戦後に東京に戻ってから青山学院について「校舎は焼け跡で、私の記憶としては講堂の裏側の土台の上に座って（先生のお話を聞き）、雨が降れば学校がお休みという日が何日もありました。その後女学部の校舎をお借りしてそこで授業は始まった」とし、中等部に進学したときには「校舎もございませんでしたし、私たちは中学部とか専門部の空いてるお部屋をお借りしてスタートいたしました。3年生になってやっと木造の長細い校舎ができたんです」と復興期の様子を語ってくださいました。最後に「本当に戦争について、こういう学びをなさってることはほんとにいいことだと思ひまして、本当に戦争だけは何とか、あってはならない」と結ばれました。

お2人目の鵜飼栄子様は、青山学院と関係が深いお家柄で、鵜飼様の祖父は組合教会・同志社の重鎮小崎弘道であり、祖母千代は親類で初期青山学院の後援者津田仙の家で育ち、青山学院の源流である女子小学校や海岸女学校で学ばれました。千代の長女安子様が栄子様のお母様にあたり、栄子様のお父様は岩村清四郎牧師であり、また栄子様のご主人鵜飼勇牧師は、明治期から青山学院に関係の深い鵜飼猛牧師のご子息です。

鵜飼様は、「（1945年5月）米軍のB29爆撃機が、当時私たちが住んでいた大田区新井宿を通過し、焼夷弾を次々と落としていきました。父は主にめぐみ教会の牧師として教会と幼稚園、めぐみ女学園を守り、当時家には父と母、そしてすぐ上の兄と私4人が住んでおりました。次々と降り注ぐ焼夷弾のバンバンという音を聞きながら、父の大きい声、「洋三を起こして一緒に」、ただならぬその声に2階で寝ていた私は急いで着替えて階

段を駆け下りました。炎が廊下を一気に流れるように広がり、手が付けられません。我が家はみるみるうちに焼け焦げていきました。「栄子、お母さんと2人で大森方面に逃げなさい。2人は絶対に離れてはいかんぞ」と父の必死な声、母と私は小さな風呂敷包みをつつ持って急いで避難しました。……翌朝煙がくすぶる焼け跡を戻り我が家にたどり着き、父と兄に再会できた時のうれしさは言葉になりません。しかし、この時愛情込めて建てた教会も、幼稚園も、私の大切なピアノも、全て焼け落ちてしまいました。この時私は17歳でございます」と激しい空襲の思い出を語っていただき、また青山学院女子専門部の入学後、「玉音放送は学校の芋畑で聞きました。日本は戦いに負けた、これからどうやって乗り越えていけばいいのだろう、お互いに顔を見合わせたり、ため息をついてぼうぜんとしていました。でも、今夜から灯火管制が終わって明るい夜を過ごすことができるものと、何とも言えない喜びが胸に起こりました」また「青山学院で学んだ3年間、校舎は焼失し、教材、資材の不足がありましたけれども、良い先生方に恵まれて学習に励み、礼拝と讃美歌に癒やされた日々を過ごすことができました」と話されました。



パネリスト 左より井上様、鶴飼様、尾上様

3人目の尾上悠紀子様は、私立恵泉女学園高等部ご卒業後、昭和28(1953)年に青山学院大学文学部教育学科に入学され、卒業後、初等部教諭として長くお務めになりました。

尾上様からは、開校まもない青山学院大学での授業や課外活動の様子などを中心にお話を伺いました。尾上様は「私は昭和9年生まれです。幼稚園の頃には戦争へという世の中の動きは異様でした。子どもは少国民と言われ、小学校は国民学校と名前を変えました。……全てお国のために、戦争に勝つために、の生活を強いられました。……3月10日は東京大空襲、300機のB29が下町を焼き尽くしました。一晩で10万人以

上の命が失われました。5月25日にはそれを上回る規模の500機のB29がやってきて、山の手一体を焼け野原にしました。その時青山学院も渋谷の一帯も、山の手一帯が被害を受けました。……そして8月15日、私の小学校5年の夏休み、ラジオ放送で天皇陛下が敗戦を宣言され、戦いは終わりました」と戦中期の様子を語り、また大学入学後の青山学院構内の様子、創部して2年目のバドミントン部に入って活動したこと、「女子学生会というのがあって、クラスから一名ずつ委員が出て、まだまだ男性中心の世の中で神山妙子先生の下で女子学生の福利厚生に気を配るという仕事でした。女子更衣室、女子控室の充実や、夏に高等部の寮を借りて女子学生のために旅行を計画実行したりなどしていました。3年生の時に女子学生会の会長を務めました」と、まだ少ない女子学生のための活動に努めたお話、さらに在学中に初等部の担任代行になり「大学の授業もあり、卒論を抱え、バドミントン部のキャプテンで、辞められない家庭教師のバイトがあって、そして日曜は教会と日曜学校で、まさに寝る間もないヘビーな3年間を過ごしました。でも、若さと情熱で乗り切りました。昭和32年4月、正式に初等部教諭となりました。初めての給料、ここに初めての給料袋が残っていたので持ってきました。手取り11,123円ということで、私の初任給です」とお話いただきました。最後に「80年以上平和な日本が続いています。それは大変うれしいことで幸せなことです。戦争は絶対にしてほしくないと思っています」と結ばれました。

当日、ご登壇の方々から、戦中・戦後のご経験を証言していただきました。戦中の危機的状況と、戦後の出発点において青山学院がキリスト教信仰を基盤に学校を徐々に再建していく様子を伝える大変貴重なお話でした。3人のお言葉は、もう戦争は決してあってはならないという点で共通しておりました。

今回の座談会も、大変有意義なものとなりました。ご登壇の方々、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。(小林)

※『青山学報』296号記載の報告も合わせてお読みいただければと思います。

# 大関和と本多庸一・貞子

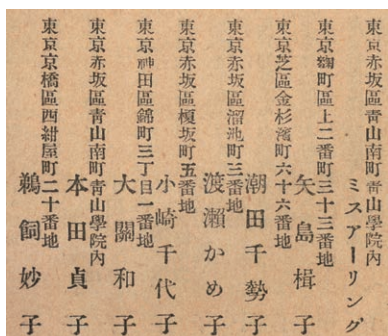


青山学院ミュージアム学芸員 佐藤 大悟

大関和<sup>ちか</sup>（1858-1932）は、2026 年度前期 NHK 連続テレビ小説「風、薫る」の主人公のモチーフとされた人物である。黒羽藩の家老の家に生まれ、夫と離婚後、日本基督教会の牧師植村正久に勧められて看護婦を志した和は、専門的な看護教育を受けた日本最初期のトレインド・ナースとなる。自ら看護婦として働くだけでなく、看護教育や派出看護業の経営に取り組み、看護職の地位向上に努めた。

こうした和の経歴は、青山学院の歴史と重ならないように見え、青山学院ミュージアムにも和が作成した史料は所蔵されていない。しかし実際には、和は青山学院第 2 代院長の本多<sup>よういつ</sup>庸一（1849-1912）・貞子<sup>ていこ</sup>（1862-1931）夫妻と親交を結んでいた。和の生涯を明らかにした亀山美知子氏の伝記を手掛かりとして、その交流を辿ってみたい。

和と貞子は、ともに桜井女学校に縁がある。1881 年、矢島楫子とマリア・ツルーが桜井女学校を経営し始めた際に、東京女子師範学校を卒業した長嶺さだ（貞子）はその教員となり、1883 年まで教えた。その 4 年後の 1887 年、和はツルーが設立した桜井女学校附属看護婦養成所に入学し、看護婦の道を歩み始めた。これ以降、貞子の結婚・育児や、和の越後高田への赴任を挟むため、両者がいつ面識を得たのかは明らかでないが、1890 年代に矯風会の活動を共にするなかで徐々に打ち解けていったと思われる。



『日本婦人矯風会 矯風界之名婦』（日本婦人矯風会、1903 年）青山学院ミュージアム所蔵

写真は、日本婦人矯風会が設立した女性救済施設「慈愛館」の、1903 年時点の委員名簿の一部で、和と貞子の名が並んでいる。和と貞子はその運営に携わるなど、

長きにわたり女性の地位向上のための活動に尽力した。

和と庸一は、貞子を仲立ちに知り合っていたと思われる。ここでは、社会運動家の木下尚江（1869-1937）と、和の弟子で看護婦の和賀操との結婚をめぐる逸話に注目したい。

和は、帝国大学医科大学第一医院で働いていた頃、新宿中村屋の創業者となる相馬愛蔵を看病したことがあった。尚江は、長野県尋常中学校と東京専門学校の後輩である相馬から和について聞き、廃娯運動で越後高田を訪れた際に知り合ってから、和と文通を重ねていた。

1898 年、尚江は長野県会選挙に関する疑獄事件（のち、無罪判決）により、鍛冶橋監獄に収監された。尚江のもとには、青山女学院在学中の妹伊和子（『青山女学院校友会会報』第 1 号、1903 年、20 頁、明治 32 年度本科の選科卒業者に木下岩子と名前がある）だけでなく、和も面会に通った。そのうち尚江と和は恋に落ち、互いに結婚を意識し始める。だが、出獄した尚江が相馬に相談したところ、経歴が釣り合わないなどと反対に遭った。こうして、尚江と和の結婚の話は立ち消えてしまう。

2 年後の 1900 年、和が尚江に、弟子の和賀操との結婚をもちかけた。尚江は躊躇するが、老母を安心させるためにと受け入れ、操と結婚した。その媒酌人は、和が本多庸一・貞子に依頼したという。

尚江の回顧録『懺悔』には、「窮乏の生涯を渡る身に取て結婚は一個の罪惡なり」と考えていた尚江が、結婚を断りに「老教師某」を訪ねたところ説得を受け、結婚を決意したくだりがある。長文となるが引用する。

老教師は笑て曰く、『若し君の言ふ如くならば、予の如きは之を何と言ふべきぞ、君の見る如く予は多くの男女を有す、長子だけは如何にかして大学まで送ることが出来ようが、他の子女に就ては何の考案もあること無し、然れども』と彼は其語に力を加へて曰く『親の其子に与へるのは決して目に見へるものゝみでは無い、其れにも優した何物かを必ず譲つて居るに相違無いと信ずるので、格別心にも掛けずに居る』と、此の最後の一句は、不可思議なる力を予の胸廓に打ち込ん

だ、予は『一考すべし』と立ち帰つたが、遂に大胆に結婚を承諾したのである

『懺悔』を収録した『日本近代文学大系』の注釈は、この「老教師某」は未詳ながら、和か、あるいは庸一かと推測している。庸一は、死別した前妻みよ子との間に三男二女（成長したのは次男二郎と長女まりの2名）、貞子との間に四男二女と子沢山であり、さらに下の写真に見られるように阿部義宗ら親類や書生を多く住まわせていたため、暮らしぶりは質素だった。また二郎は、この1900年に東京帝国大学に入学している。貧困を理由に結婚を渋る尚江に対し、親が子に与えるものは目に見えるものだけでなく、それ以上の目に見えないものを与えていると説く、いかにも庸一らしい説教内容からも、「老教師某」は庸一と特定してよいように思われる。

結婚後、尚江と操は生涯添い遂げた。一方、和は再婚することなく、看護の道を一途に歩んだ。1901年に東京看護婦会の経営を鈴木雅から引き継ぎ、1909年には大関看護婦会を設立した。



1906年頃の本多家 前列左から七男鐘七、五男直哉、六男恙六、庸一、貞子、三女とも、四女しづ、後列左から阿部義宗、阿部友一、四男愛雄、長女まり 青山学院ミュージアム所蔵

1912年に庸一が没した後、貞子は青山学院の院長館を出て、各地に転居した。病気がちとなっていた貞子を心配し、和は多忙のなかでも貞子をたびたび見舞った。

1918年頃、庸一の次男の二郎は、遠い親戚にあたる鹿内貞を、貞子の手伝いに呼んだ。両親を失っていた貞にとって、本多家に行けば学校に通わせてくれるかもしれないとの期待もあったという。貞子の世話をするうちに、貞は和や大関看護婦会の看護婦たちを見て、看護婦に憧れを抱くようになった。貞子の相談を受けた和は、本多家の親戚ということで貞を快く預かった。こうして貞は、1920年に大関看護婦会に入会し、看護婦となる修業を始めた。

翌1921年、貞は和の妹<sup>こく</sup>紘の息子、川原博巳と結婚した。この結婚は和の意向によるもので、本多家も歓迎していた。一方で、晴れて看護婦になれたにもかかわらず、自分の意に沿わない結婚のために家庭に入ることが余儀なくされ、貞は落胆したという。

和や貞たち大関家は、飯田橋駅近くの大関看護婦会の建物に同居していた。そのなかに、和の弟<sup>ふくひこ</sup>復彦の忘れ形見である大関増博がいた。和は、栃木県の私立烏山中学校を卒業していた増博を呼び寄せ、青山学院に通わせた。青山学院ミュージアムに残る記録によると、増博は1924年に青山学院高等学部実業科を卒業し、島根県立浜田中学校に赴任した（『青山学報』第24号、1924年5月）。1930年には拓務省の官員に転じたようである（『青山学報』第82号、1930年4月）。和が甥にあたる増博の進学先に青山学院を選んだのは、やはり庸一・貞子との縁によるだろう。

1923年の関東大震災により、和と貞子はともに住処を失った。和は本郷弓町に大関看護婦会を再建した。1929年に脳溢血で倒れ、大関看護婦会の経営を川原貞に譲るも、翌年に別の弟子が引き継いだ。病床の和を、妹<sup>こく</sup>紘や木下操が看病したという。貞子は青山学院の近くの青山南町7丁目にある清和女塾という女子学生寮に入り、余生を過ごした。晩年の和と貞子の交流については資料がなく、詳細は不明である。貞子は1931年、和は1932年に永眠した。

大関和と本多貞子を中心とする人間関係からは、近代日本における女性の生き方や、家族のあり方の一端を垣間見ることができる。今後、本誌の「青山学院史探訪」では、こうした青山学院の歴史にまつわる記事を掲載する予定である。（大学青山学院史研究所助教）

#### 参考文献

- ・井上ゆり子『力を与えませ 本多庸一夫人貞子の生涯』（青山学院、2004年）
- ・亀山美知子「大関和のこと―川原貞氏聞き書き―」（『京都市立看護短期大学紀要』第16号、1991年）
- ・亀山美知子『大風のように生きて 日本最初の看護婦大関和物語』（ドメス出版、1992年）
- ・相馬黒光『穂高原』（女性時代社、1944年）
- ・『日本近代文学大系 第20巻 木下尚江集』（角川書店、1973年）
- ・本多泰『本多庸一の親族 明治・大正・昭和、そして』上巻・下巻（自悠工房、2023年）
- ・柳田泉『日本革命の予言者木下尚江』（春秋社、1961年）

# 2026 年度前期企画展 「聖書翻訳の軌跡と青山学院」

青山学院ミュージアム学芸員 佐藤 大悟

青山学院ミュージアムは 2026 年 5 月 8 日～7 月 10 日に、2026 年度前期企画展「聖書翻訳の軌跡と青山学院」を開催しました。青山キャンパスにあるミュージアムの企画展示室を本会場とし、相模原キャンパス万代記念図書館入口にもサテライト小展示を設けました。



企画展の会場風景

この企画展は、昨 2025 年に口語訳聖書刊行 70 周年を迎えたことを記念し、一般財団法人日本聖書協会との共催により実現いたしました。青山学院ミュージアムと日本聖書協会が所蔵する貴重な日本語訳聖書、翻訳関係資料を一堂に展示し、幕末から現代に至る聖書翻訳の歩みを辿っています。監修には、近藤泰弘青山学院大学名誉教授のご協力を賜りました。

**I 近代聖書和訳の始まり**では、19 世紀の禁教下における日本語訳聖書を展示しました。1837 年にシンガポールで刊行されたギュツラフ訳『約翰福音之伝』は、最初の日本語訳聖書として知られています。来日宣教師のヘボンとブラウンによる『馬可伝』<sup>マルコ</sup>『約翰伝』<sup>ヨハネ</sup>『馬太伝』<sup>マタイ</sup>は、次に述べる明治元訳聖書の前提となりました。

**II 明治元訳聖書**のタイトルである明治元訳聖書は、翻訳委員社中訳により 1880 年に完成した新約聖書と、聖書常置委員会訳により 1887 年に完成した旧約聖書の総称です。青山学院初代院長のマクレイも、翻訳委員社中に加わっています。明治時代前期に刊行された、多彩な分冊版聖書を紹介しました。

**III 大正改訳聖書**では、1917 年の『改訳 新約聖書』に至る翻訳の過程に注目しました。青山学院神学部校舎における翻訳作業を捉えた写真や、改訳委員会の書

記を務めた別所梅之助が残した記録、翻訳の各段階を示した複数の翻訳稿本を並べました。

**IV 日本聖書協会の設立**として、明治初期に設立された各聖書会社が、1937 年に日本聖書協会へと統合される過程を紹介しました。戦中・戦後に翻訳が進められたものの刊行されなかった、旧約聖書改訳中央委員会の改訳稿本も展示しました。なお、この翻訳は 1948 年から、ミュージアムがある間島記念館の一室で進められました。

**V 口語訳聖書**では、文語体の聖書に代わって普及した口語体の聖書を展示しました。口語訳の新約聖書は 1954 年、旧約聖書は 1955 年に刊行されましたが、その翻訳には戦前・戦後に青山学院で教えた松本卓夫、左近義慈、浅野順一、高柳伊三郎らが携わりました。



V 口語訳聖書の展示ケース

**VI 共同訳聖書と新共同訳聖書**では、カトリックとプロテスタントの協力による共同訳の聖書について扱いました。日本聖書協会から青山学院大学図書館に寄託された点字聖書や、青山学院で実際に使われた講壇用聖書なども陳列しました。

**VII 聖書協会共同訳聖書**として、最新の日本語訳聖書である聖書協会共同訳聖書を集めました。2023 年に発売された講壇用聖書や、2025 年に聖書普及事業 150 年を記念して出版されたミニチュアバイブルも並べました。

青山学院ミュージアムの特別展・企画展の展示資料リストは、毎年 5 月発行の『青山学院 近現代史研究』に掲載しますので、あわせて御覧いただければ幸いです。

(大学青山学院史研究所助教)

## Topics

## 大学青山学院史研究所シンポジウム開催

2025年11月15日(土)、青山学院ミュージアム開館・『青山学院一五〇年史』完結を記念して、『青山学院一五〇年史』の成果と日本近現代史研究』と題して、青山学院史研究所主催のシンポジウムを開催しました。

『青山学院一五〇年史』の編纂経緯や編纂に伴う近現代史研究の成果につき所長・所員が報告し、お招きした他大学の年史編纂関係者・日本近現代史研究者4名からのコメントや、フロアも含めた質疑応答により、『青山学院一五〇年史』編纂の意義や今後の大学史編纂に向けた課題が明らかになりました。



## 新任職員研修会

2026年4月6日(月)、学校法人青山学院に入職した専任事務職員の研修の一環として、ミュージアムの見学が行われました。事前に学院の歴史紹介映像「地に播かれた三粒の種」を視聴した後の研修で、学芸員の解説を聞きながら、展示室を見学し、これから働く学院の営みに触れ、創立以来の功労者たちへ想いを馳せるひと時となりました。



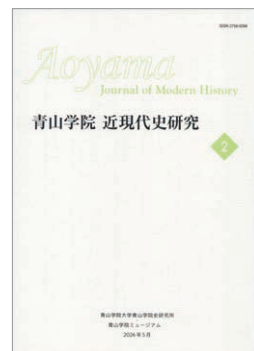
## 博物館見学実習

2025年12月15日(月)に文学部比較芸術学科「博物館実習Ⅰ」、2026年3月26日(木)に教育人間科学部「博物館実習Ⅱ」、それぞれの受講生が青山学院ミュージアムで見学実習を行いました。ミュージアム全体を各自自由に見学した後、ミュージアム設立の趣旨、使命、施設概要、展示室に係る解説等を学芸員から聞き、資料を保管しているバックヤードの見学も行いました。



## 紀要刊行

青山学院史研究所紀要『青山学院近現代史研究』第2号が刊行されました。研究所所員による論文の他、今号からは、青山学院ミュージアムの年報も収録しています。またこの第2号では、2025年に完結した『青山学院一五〇年史』の記録として、刊行物一覧、写真・図表一覧、通史編索引等も掲載しています。



## 展示資料紹介 学びの場から戦地へ―出陣学徒休学願が伝えるもの― 青山学院ミュージアム研究員 日向 玲理

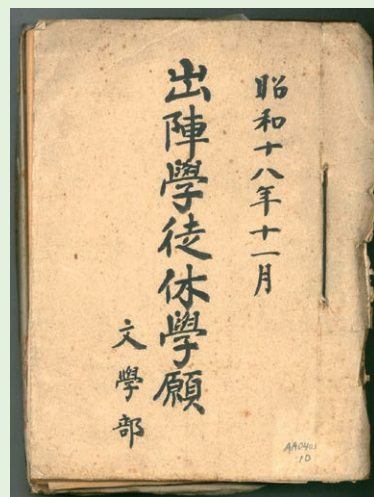
今回紹介するのは「青山学院の歴史」の展示室に展示されている「昭和十八年十一月 出陣学徒休学願 文学部」という資料です。これは、学徒出陣に際して文学部の学生が提出した休学願を綴った簿冊です。簿冊には、本籍地や郵便連絡先、所属学部学科・学年、氏名、生年月日のほか、徴兵検査の日付や判定結果、入営(団)期日、入営(団)部隊名などが記録されています。戦局が悪化するなか、政府は昭和18(1943)年10月、「在学徴集延期臨時特例」、「昭和十八年臨時徴兵検査規則」を定めました。これによって多くの学生が学業を中断し、軍務に就くこととなりました。

この簿冊に収められた一枚一枚の休学願は、学生一人ひとりの人生の記録であるとともに、展示でご覧いただいたように創立以来培われてきた青山学院の教育活動が戦争によって大きな影響を受けたことを示す資料です。

この簿冊に記された学生たちは、その後それぞれ異なる人生を歩みました。戦地から帰還して学業や仕事に復帰した者がいた一方で、戦死や殉職によって帰らぬ人

なった者もありました。本資料は、戦時下において学生たちが学問の場を離れざるを得なかった現実を伝えるとともに、その後の人生に思いを馳せる手がかりとなります。

本資料をきっかけとして、追悼文集『青珠集』や証言記録『青山学院と出陣学徒』などにもぜひ触れていただきたいと思います。そこには、学徒出陣を経験した学生やそのご家族の声が記されています。こうした記録を通して、それぞれの人生に刻まれた戦争の記憶に向き合い、戦争と平和について考える契機としていただければ幸いです。



## 今後の予定

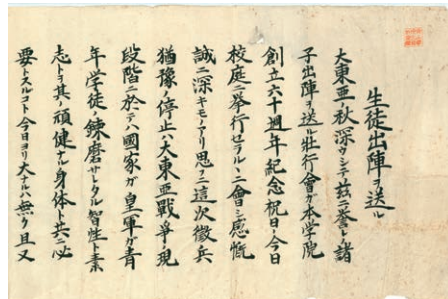
### 特別展

#### 2026 年度特別展 「昭和期の青山学院」(仮題)

2026 年は、昭和元（1926）年から満 100 年にあたります。本特別展では、昭和という激動の時代における青山学院の歩みを、青山学院ミュージアムが所蔵する史料を中心に跡付けます。災害・戦争・高度成長・大学紛争・・・さまざまな出来事に青山学院がどのように向き合ってきたのか、その実像を見直し、未来の青山学院について考える契機となれば幸いです。

**会期：**2026 年 11 月 6 日（金）～ 12 月 21 日（月）

**会場：**【青山キャンパス】間島記念館 1 階  
青山学院ミュージアム 企画展示室  
【相模原キャンパス】B 棟 1 階 万代記念図書館入口  
(サテライト小展示)



生徒出陣壮行の辞



大学紛争期(正門)

### 青山学院ミュージアム共催 総合研究所プロジェクト展示企画

#### 「津川主一の仕事 ～共に歌おう～」(仮題)

総合研究所ユニットが取り組んできた『「津川主一コレクション」(青山学院ミュージアム所蔵)のデジタルアーカイブ化及び音楽活動の検証』(2024～2026 年度)の成果発表として、牧師から音楽家へ転身した津川主一の仕事を貫く音楽と人々への一貫した思いを紹介します。

**会期：**2026 年 10 月 1 日（木）～ 10 月 17 日（土）

**会場：**【青山キャンパス】間島記念館 1 階 青山学院ミュージアム 企画展示室



## 利用案内

青山学院ミュージアムはどなたでも無料で入館できます。是非お越しください。

### ミュージアム見学

**開館時間** ※入館は閉館の 30 分前まで  
月曜～金曜日 / 9:30～16:30  
土曜日 / 9:30～12:30  
第3土曜日 / 9:30～16:30

夏期間中(8/1～9/12)は  
月曜～金曜日 / 9:30～16:00  
但し、8月中の水曜日は休館

入館無料。事前予約の必要はございません。ただし、10 名以上でのご来館の際は、1 週間前までにメールにてご連絡ください。  
車椅子利用や階段昇降に不安のある方はご来館前にメールにてご連絡ください。

#### 休館日

日曜・祝日、その他青山学院が定める休日等  
詳細は青山学院ミュージアムのウェブサイト内の開館カレンダーをご参照ください。



【ご来館の皆様へ】 来館時の注意をミュージアム入口に掲示しております。遵守して下さるようお願いいたします。

### レファレンス・資料閲覧

研究調査等の特定の目的に限りレファレンス・閲覧が可能です。ご希望の方は、当ミュージアムのウェブサイト内の利用案内より、「レファレンス・資料閲覧申込書」をダウンロードし、必要事項を入力の上、メールにて添付してご連絡ください。  
なお、資料の館外貸出はできません。

#### 閲覧時間

月曜～金曜日 / 9:30～16:30  
夏期間中 / 9:30～16:00  
(ミュージアム開館日内)

メール：ag-museum@aoyamagakuin.jp  
(@を半角に変えてください)

ミュージアム、ウェブサイト内および本誌内の画像・文章の無断使用・転用を固く禁じます。  
ご利用希望の場合、事前にメールにてご相談ください。

## Aoyama Gakuin Museum Letter

青山学院ミュージアムレター 第 2 号

2026 年 7 月 22 日 青山学院ミュージアム編集・発行

青山学院ミュージアム運営委員会  
青山学院ミュージアム事務局  
大学青山学院史研究所



青山学院ミュージアム  
AOYAMA GAKUIN MUSEUM